

## II 発災時

### 1 状況把握

台風の場合は、時々刻々と台風の進路や被害状況が報道されますので、時間的余裕や心の余裕はあると思います。

ところが地震の場合は、多くの観測機器を配置して地盤の変化等を日夜注意深く研究機関、大学等で観測を行っています。それでも何時発生するかは全く予測がつくものではありません。最も逼迫している東海地震に関しては、観測体制が整備されており、もし地盤の変化等によって地震が発生する予兆現象が見られた場合には、気象庁の中に学識経験者等が参集した地震予知判定会議が開催され、「数日以内に巨大地震が発生する恐れがある」などの判断が出されることになっていますが、それにしても果たして何日の何時かまでは到底予知できるものではありません。

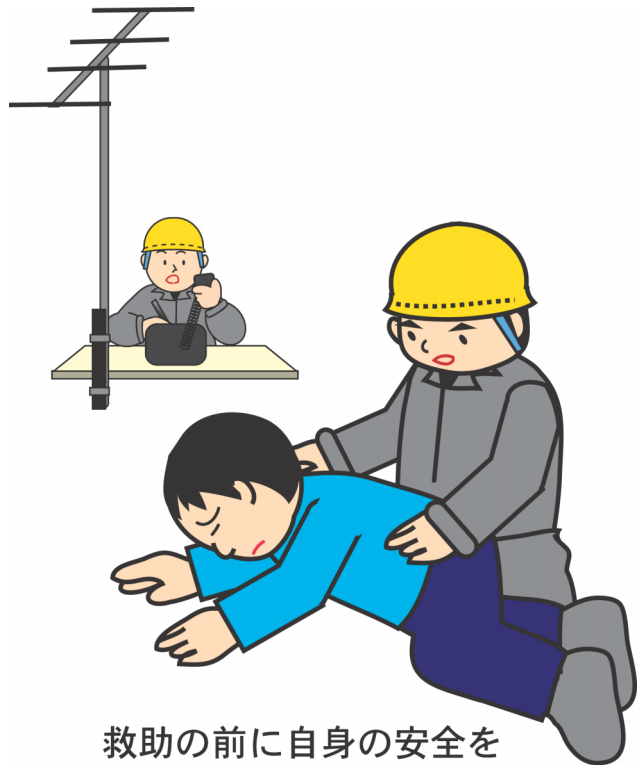
巨大地震は、地球のプレートの沈み込みによる地盤の歪の跳ね返りで発生するもので、地球規模の100年とか400年もの長い周期で発生し、地球の自然の営みですら周期のズレが発生しますので、ある日突然発生すると考えておく必要があります。

もし、巨大地震が発生しますと電気、ガス、水道などのライフラインが寸断され、交通機関もストップし、道路は、陥没、落下、数々の倒壊物が散乱して車は走れなくなるおそれが十二分にあります。

また日常的に使っている電話にしても、固定電話は電話回線の切断、電話局機能の障害が起きるおそれもありますし、そもそも回線の設計は何事もない日の状態で通話ができるように設計されていますので、一斉に多くの電話発信（「異常呼」と言います）があると回線がパンクして使い物にならなくなることから、緊急を要する防災関係機関用の一部の電話しか発信できないように措置されています（「発信規制」と言います）。携帯電話も同じく異常呼には到底対応できず、おそらく2～3分で全く使い物にならない状況に陥ります。ただし、公衆電話は

発信規制の対象外になっていますので、自宅の電話がつながらなくてもかけられる可能性はあります。そんな状況の中で、状況把握をどのようにするかとの課題が発生します。

報道機関の報道にしても、「どこどこで地震が発生した模様です」との速報は入るでしょうが、どのような地震が何処で発生したかの確認については結構時間がかかりますし、被害状況の報道については迅速な情報収集が初期段階では難しいですから、なかなか報道されることはないでしょう。これは災害が発生したとの一報が入ったとしても、報道機関としての責任において情報の事実を確認する必要があるために、結果として報道が遅れてしまうのです。



### 救助の前に自身の安全を

海岸地帯にお住まいの方は、地震の発生に伴って海岸地帯では津波が発生するおそれがありますので、急いで高台に走って逃げてください。気象庁では地震が発生した際には「3分以内をメドに津波警報を出す」としてありますが、その津波警報の報道を待つ余裕は全くないと覚えておいてください。

中央防災会議のホームページ (<http://www.bousai.go.jp/jishin/chubou/>) の東海地震に関する専門調査会の報

告書等には、東海地震や東南海地震が発生した場合の津波の規模や場所別の到達予定時間が公表されておりますが、地震発生場所に近い海岸では数メートルにも及ぶ津波といますか、正に壁のような海水が直ちに襲ってくるおそれがあると言われております。

例えば、東海地震や東南海地震が陸地に近い場所で発生した際には5～6mもの津波が直ぐに襲ってくると想定されています。海底の地形や深度の違いによってこの数倍もの高さに増幅されることもあります。川の砂などが流れ込んで浅くなっている海底の場合や三陸海岸のように湾の奥が狭くなっている地形の場合は特に危険です。

津波の速度は海が深ければ深いほど伝達速度は速く、太平洋の平均深度は4,000mですが、この深さですと時速600キロものジェット機並みの速度になるそうです。津波が陸上にまで上がった場合はグッと速度は遅くなりますが、それにしても大人の男が全速力で走ってようやく逃げ切れるかどうかとの速度のようです。しかし実際には、道路が高台に向けて一直線であり道路上に障害物が全くない状態でない限り逃げ切ることはできないと思ってください。

このため、家族間であらかじめ津波の避難場所を決めておき、「地震が起きたら何はさておいても直ぐに避難場所に逃げる」との申し合わせをしておいてください。木造の家屋ですと津波によって浮き上がり流されてしまうおそれが強いので、津波の時に木造家屋の中に留まることは極めて危険です。

津波は、ほとんどの人は経験したことがなく、時々テレビで地震発生に伴う津波の映像が流されることがあって「津波ってあんな程度か」と思っておられるかも知れませんが、それは大きな間違いであり東海地震等による5～6mもの大津波となると想像を絶するものです。

「地震 ⇒ 津波 ⇒ 高台に逃げる！」との言葉をしっかり記憶しておいてください。

海岸地帯以外にお住まいの方の場合は、地震が発生した際には、

- ① 自分自身の負傷の有無のほか、身の回りの状況を確認する。
- ② 家族の安否を確認する。
- ③ 家の状況を確認し安全性を確かめる。ことに火事が発生していないかどうかは緊急を要します。
- ④ 窓などからご近所の状況を見て、火災等が発生していないか否かを確認する。
- ⑤ 親戚の安否を確認する。

このことをまず行ってください。

次に、自宅周辺や市町村の被害状況確認の段階に移りますが、決して闇雲に走り回ることがないようにしてください。道路上は危険がいっぱいあるかも知れません。家屋、構造物の倒壊、道路の陥没、切れた電線、ガス漏れ、ガラスや金属片の散乱などの事態になっているおそれがあります。いつ何時強い余震が襲ってくるかも知れません。

ことに危険なのはブロック塀、建物の側壁やガラス、看板などで、次の余震発生時に倒れたり落下してくるかも知れません。

自宅のベランダ等見晴らしのきく所から見える範囲の状況を冷静に見てください。

災害が発生した際に最も頼りになるのはご近所の方々の相互の協力です。「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があるとおりに、ご近所が被害に遭われているようでしたら、直ぐに駆けつけ「助けを必要とするのか」、「何をすれば良いのか」との声をかけて相互に助け合うことが大切です。また助けを求める時に漫然と「助けてくれ」と言うのでは大地震のために虚脱状態に陥った人々は「人を助けなければ・・・」との意識を持つことができず放置されるかも知れませんが「その人（名前が分かれば名前）、（どうやって）助けてくれ！」とハッキリ言うことが必要と言われております。

## 2 アマチュア局相互間の被害状況把握

家族や親戚の安否が確認でき自宅及び自宅周辺が被害や火災が発生していないことが確認できたら、非常通



信実施計画上のアマチュア局相互間で連絡を取り合い、アマチュア局の運用ができるか否かを確認してください。

できれば、コアになる方を予め決めておいて、コアになる方から順次ロールコールを実施することが効率的です。コアの方からの発信がなければ誰かコアの代理を務めてください。

もし、ロールコールで連絡が取れない局があった場合には、最も近隣のアマチュア局の人が安否確認に行き、遠方の地など容易に確認することができないときには、無事であると信じて計画どおり非常通信実施体制の構築に向けて活動していかざるを得ないと思います。

同じ趣味を持つ日頃からの仲間として安否確認ができないまま別の行動に移ることは心理的にかなり苦痛ですが、市町村全体の災害救助、被害の軽減のための行動に移らざるを得ないものと考えます。

### 3 どのアマチュア局が災害対策の応援に参加できるか否かの確認

上記2により、アマチュア局の被害状況が確認できたら、非常通信実施計画どおりに実施できるか、何らかの物的、人的な修正を要するのか迅速に確認してください。

「物的」とは、当初災害対策本部に持ち込もうとしていた無線設備が使えなくなった場合を指し、「人的」とは、非常通信実施上予定していたアマチュア局が参画できない事態を指します。

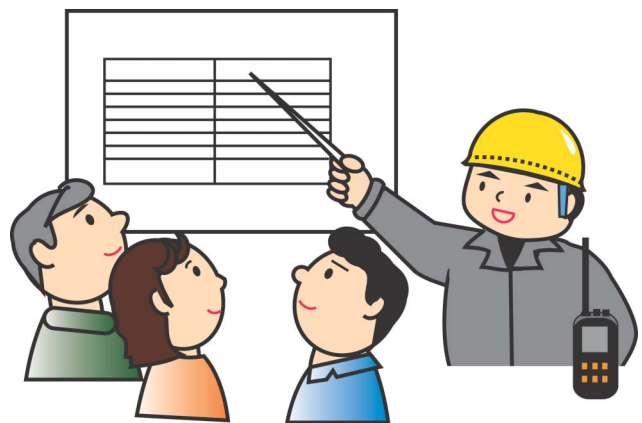
物的な変更を要する場合には、非常通信に使用すると

していた周波数等を変更してしまいますと通信系全体が混乱しますので、できる限り周波数変更をしないように同等の代替品を相互に連絡を取って確保してください。人的な変更の場合には、誰が行うとしていたどのような業務を誰に頼む、と全員の人に周知しておくことが大切です。

### 4 役割分担の決定およびその周知

コアになる方が、全体を把握した上で、非常通信実施計画に沿って役割分担を決め、誰が何処でどのような業務を実施することとした旨を全員に周知してください。

役割分担を明確にし、それぞれの役割を全員が知らないで混乱を生じますし以降に実施する非常通信を円滑に実施することが困難になります。



役割分担  
ハムとして何ができるか

### 5 災害対策本部等へ誰と誰がどのような設備を持っていくかの確認など

役割分担が決まったら、災害対策本部に誰と誰がどのような設備を持っていくかを再度確認してください。ケーブル1本を忘れただけでも通信ができなくなります。

そして災害対策本部での運用開始予定時間を周知してください。

非常通信はチームワークで行うものであり、今後中心的役割を果たす災害対策本部に設置したベース局（以下「ベース局」と記載します）のアマチュア局の運用開始

予定時間をみんなが知っておく必要があります。

## 6 災害対策本部等とのアマチュア局の役割の明確化の確認

無線設備一式を災害対策本部に搬入する際には、本部や防災課の人に災害救助、被害の軽減を図るためにこれからアマチュア無線によって非常通信を実施する旨の話をし、場所と電源の確保をお願いしてください。

アマチュア局の運用態勢が整ったら、本部や防災課の人とアマチュア局による非常通信実施の役割の明確化を図ってください。例えば、①被害情報の収集を行う、②どこに負傷者がいるとの情報伝達を行う、③どこに避難者が何名いるとの情報収集を行う、④避難所と災害対策本部の間の情報伝達の役を担う、⑤防災関係機関が活動する上で不足している情報伝達手段の補助を行う、などのアマチュア無線がこれから実施する範囲を明確にしておくことが大切です。つまり、アマチュア無線による非常通信の役目と範囲を明確にすることです。そうしないと何のためにアマチュア無線をやっている人がいるのかも認識されず、かえって災害対策本部が混乱しますし本部の人達から迷惑がられることになりかねません。



## 7 災害現場に派遣するアマチュア局の安全の確保

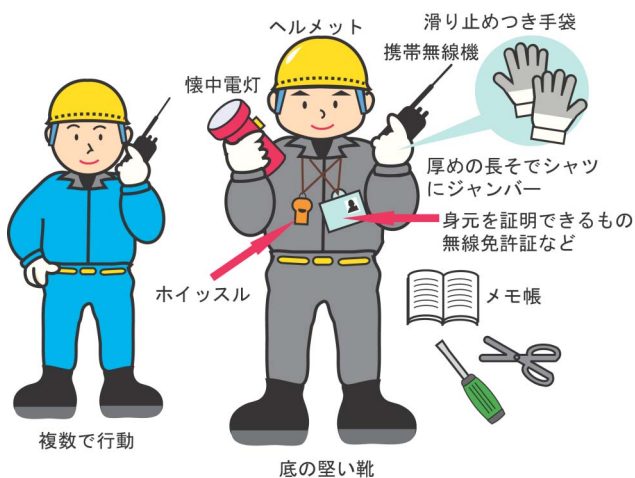
上記6によりアマチュア局の役割が明確になったら、いよいよ災害現場等にアマチュア局の人が出動することになりますが、くれぐれもけが等の二次災害に遭わないようにすることが最も大切です。

アマチュア局の人は、災害救助のプロでもなければス

ーパーマンでもありません。普通の市民であり普通の技量と体力しかありませんので、絶対に無理をしないようにしてください。

災害現場に行かれる方は、ヘルメットを被り、厚めの長袖のシャツとズボン、底の堅い靴、滑り止めのついた軍手、手拭、懐中電灯、ホイッスル、身元を証明できるもの、筆記用具とメモ用紙などで身を固めた上で、無線機と予備の電池、できればドライバー等の工具類を持って複数の人と一緒に出発してください。単独行動は危険です。

災害現場に行く途中で倒壊しそうな建物や落下物がないかどうかを確認しつつ、足元が危ないと思われる箇所では迂回し、深さがハッキリと分からない水溜りや川には決して足を踏み入れないでください。流れる川があった場合、流れの速さで水の力が大きく変わりますが30センチ以上の深さですと、大人でも足をすくわれ転倒し流されてしまうおそれがあります。そして要所要所で現在位置をベース局に報告してください。



## 8 ベース局からの通信統制の実施

災害が発生しますと通信は輻そうし、非常通信も円滑に実施できないおそれが生じます。非常通信の実施態勢に参画したアマチュア局相互間の通信は極力差し控え、ベース局と派遣先のアマチュア局との通信を中心に実施するようにしてください。

ベース局側の人にとっては、いつ災害現場から重要な



通信が飛び込んでくるかも知れませんし、さらに重要な報告がなされるかも知れませんが、送信は極力要領よく短時間でやり、可能な限り受信しているという方法がベターです。ただし、受信の際には大きな音を流さないようにしてください。みんな緊張し疲労もして殺気立っていますので大きな音を流すとみんなが迷惑します。

またベースになる局にあっては、当該周波数がクリアになるように努め、非常通信実施態勢に参画する者以外の電波の発射は差し控えていただきたいとお願いをすることが必要です。

言わばベース局が通信統制をするとの対応で望んでいただきたいと考えます。



ベース局からの通信統制

#### 9 ベース局からの定時連絡の励行

ベース局にあっては、災害現場等に派遣したアマチュア局との間で30分に1回とか1時間に1回とか定期的にロールコールを実施するなど、派遣先のアマチュア局の人の安否、現在の位置や状況の把握をするようにしてください。

ベース局は全体の中心的役割を果たすものであり、全体の状況を常に把握するとの意識が必要です。



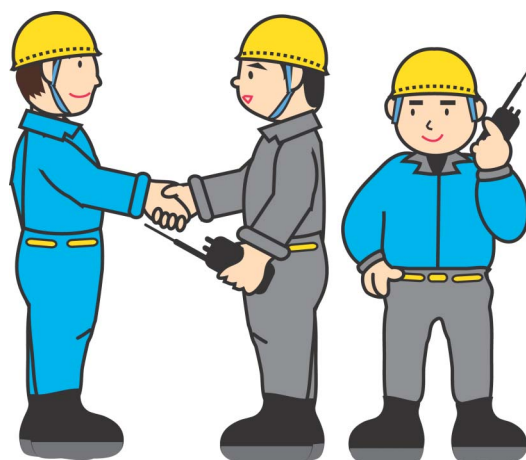
#### 10 交代要員の確保

いったん災害が発生すると1日や2日で災害対策が終わるものではありません。

被害状況の把握、被害の軽減措置、被災者の救護、救援物資の搬送など一連の作業が延々と続きます。終了の時期が分からない非常にロングランの活動となります。

非常通信体制に参画したアマチュア局の人々には、家庭もあれば仕事もありますのでいつまでもそのまま活動に参画できる訳ではなく、必ず一定の期間や時間ごとに交代をしなければなりません。多くの交代要員を確保し、交代態勢の構築をしなければなりません。

このようなところから、非常通信態勢を維持するためには、大勢のアマチュア局の参加が必要不可欠であり、どのような要員の確保手段があるか日頃から考えておく必要があります。



交代要員の確保